





ラスボスの思想(11)



情報兵器

春日信彦





# 目次

ラスボスの思想 (11) .....	1
--------------------	---



## ラスボスの思想 (11)

1

### 科学的かつ宗教的思考

世界中には、多くの科学者たちがいる。科学者とは、いかなる人たちでしょうか？ おそらく、多くの人は、教授、博士といった人たちをイメージするのではないのでしょうか。確かに、何らかの肩書がなければ、一般的には、科学者とは呼ばれません。中学卒の人が、何らかの発明や発見をすれば、有名人にはなるでしょうが、学会で認められるような科学者にはならないでしょう。というのは、学歴も肩書もないからです。

肩書があれば、学会や世間では、科学者になれます。あくまでも、私の見解にすぎませんが、科学者は、学歴や肩書によって承認されるべきではないと思っています。たとえ、大学卒でなくとも、肩書がなくとも、その人の発言が、科学に値するならば、その人は科学者と言えると思います。だから、小学生でも、中学卒でも、科学者になりうるのです。

そもそも、科学とはどういうものなのでしょうか？ 一般的には、自然科学、人文科学、社会科学、など、呼び名はありますが、科学を明確に定義するのは、難しいように思えます。例えば、ある大学教授が、何らかの政治学の論文を表すれば、彼は、科学者と言えるのでしょうか？ 数学者や宗教学者は、科学者と呼べるのでしょうか？

科学と相反するものに宗教がありますが、それでは、科学と宗教にはどのような違いがあるのでしょうか？ 科学は、現実の世界を表すもので、宗教は心の世界を表すものだと考えたとしても、心理学や精神病理学などは、心の世界を解明する科学です。宗教も心について解明している面もあるでしょう。ならば、科学と宗教は、共有する一面があるということになります。

当然、小説家は、科学者とは呼ばれません。では、小説家は、科学者ではないのでしょうか？ 確かに、小説家は、架空の世界を創造するわけですから、科学者とは言えないでしょう。でも、架空の創造の世界においても、現実と無関係というわけではありません。架空の世界においても、現実近づいていく内容であれば、科学的と言えるのではないのでしょうか。

私たちは、言語や記号を用いて、現実によく思考をしたり、現実から遠ざかる思考をしたりと、交流電流の波形のような思考をしているのです。現実によく思考を科学と呼び、現実から遠ざかる思考を宗教と呼んでもいいのではないのでしょうか。私たちの思考は、科学的であったり、宗教的であったりするのです。

### 常識

私たちは、常識を利用して生活しています。この常識は、科学からの情報と宗教からの情報からなっています。ということは、私たちの知識と行動は、科学的であると同時に宗教的なのです。だから、役に立つ常識だからと言って、真実だとは言えません。例えば、太陽は動いてはいませんが、実務的には、太陽は東から西に動いていると考えて生活しても問題はありません。でも、現実には、地球が動いているのです。

そこで、太陽の例を使って政府について考えてみたいと思います。太陽が動いていると考えて、生活に問題がないということで、政府が、太陽は動いているという常識を広めたとします。この場合、一般庶民の私たちは、別に生活に困らないわけだから、政府に苦情を呈さないでしょう。でも、地球が動いているという事実を知っている科学者たちは、政府に反論するでしょう。

科学者たちの意見が政府に取り上げられるならば、常識は変更されるでしょう。でも、政府が、科学者の意見を取り上げず、あくまでも、太陽が動いていると主張したならばどうでしょう。さらに、政府に反抗する科学たちを取り締まったならば、どうなるのでしょうか。常識は、発展せず、いつまでも非科学的常識がまかり通ることになります。

今、太陽の例で考えてみましたが、次は、コロナワクチンの例で考えてみましょう。一般庶民の常識では、コロナワクチンは、予防効果があり、健康に良いものとなっています。政府も、この常識を主張しています。ところが、コロナワクチンは、有毒で体に良くないものだと主張する科学者たちがいます。また、彼らの意見が正しいものだったとしましょう。

政府の意見と科学者の意見が対立するわけですが、政府が、科学者の意見を取り入れるならば、常識は科学的となるでしょう。でも、政府が、科学者の意見を十分に検証せずに、頭から否定し、さらに、政府に対して反抗的意見を持つ科学者たちを取り締まったならどうなるのでしょうか？ 一般庶民は、彼らは嘘を言った科学者だと思うに違いありません。そして、相変わらず非科学的常識が常識としてまかり通ることになります。

この非科学的常識が、実務上、役に立つものであれば、問題にしなくともいいのですが、科学者が言うように、それが有害であったらどうなるのでしょうか。有害なコロナワクチンが普及すればするほど人々は病気なるということなのです。政府によって、常識が作られていくのが現状です。我々は、安易に、政府が作る常識を信じていいものなのでしょうか？



たとえば、我々は、政府が作り上げた常識であっても、安易に盲信せず、科学者の意見を尊重すべきでしょう。一般庶民は、科学者ほどの知識はありません。だから、科学者が言っていることが本当なのかはわかりません。でも、科学者の意見も踏まえたくて、信じ込んでいる常識を再構築すべきではないでしょうか。

今、まさに、我々は、政府が作り上げた常識を疑う時期に来ているといえないでしょうか。一般庶民は、政府、医療、メディア、などを盲信しています。この盲信が、生命の救済に役立てばいいのですが、死を招く可能性もあります。あくまでも、常識は、科学的でもあり、宗教的でもある。また、有益的でもあり、不利益的でもある。これらのことを心すべきでしょう。

### 情報兵器

私たちは、日々、安定した生活を送っている限り、特に生きているということを考える必要はありません。でも、昨今、新型コロナウイルス感染やワクチン接種副反応という言葉が、毎日のように報道される中、「生きる」ということを考えざるを得ないように思えます。生物学的に考えると、酸素を摂取し、生命維持に必要な食物を摂取すれば、私たちは、生きていけるでしょう。

さらに、私たちは、社会的にも生きています。社会的に生きるとは、どのようなことでしょうか？ ほとんどの人は、家族生活、学校生活、職場生活、などを送っていることでしょう。これらの生活において大きな役割を果たしているものがあります。それは。五

感を通しての情報です。私たちは、生まれた時から、耳、目、鼻、指、口、などを使って、多くの情報を取得しています。

特に、私たちは、家族や学校で言語を徐々に習得するにつれて、言語情報に従って、発言し、また、行動するようになっていきます。次第に、言語情報は、その人の性格や思考を形成していきます。私たちの言語情報の中でも主要な情報は、日常の生活から取得する常識です。この常識は、科学的な要素と宗教的な要素を含んでいることを前述しました。

7

常識は、日常生活を送るうえでなくてはならないものです。ということは、常識が私たちの生活と生命に大きくかかわっているということです。すでに述べたように、常識は、科学的な要素と非科学的要素を含んでいます。また、政府の発言が、企業、医療機関、教育機関の言動に大きく作用しています。言い換えれば、政府の発言が、大半の常識を創造しているといえるのです。

ということは、政府によって作られた常識によって、国民の思考や行動が左右されるということです。このことは、すでに、政府政策において何度も実験されています。国民は、政府やメディアが作り出す情報に基づいて、国民は発言したり、行動するという実験データがあるのです。身近な例でいえば、メディアが作り出すファッションの流行がわかりやすいのではないのでしょうか。

政府が作り出した常識が国民にとって有益なものであれば、問題ないのですが、非常に不利益な場合は、重大な問題となります。万が一、政府が、常識を悪用したならば、国民はどうなるのでしょうか。もし、政府が、生命にかかわる不正情報を常識として国民に与えたならば、そして、国民がその情報を盲信したならば、国民は、死に瀕することになります。

8

国民の言動を左右する情報は、「情報兵器」と言えないでしょうか？ 兵器には、核兵器、気象兵器、生物兵器などありますが、情報兵器は、それら以上に破壊力があるよう

に思えます。戦争では、時の政権によって、情報兵器が利用されました。それによって、戦争は正当化され、戦意を高められ、国民はお国のために出兵しました。さらに、終戦間際には、集団自害までさせられました。

私たちは、政府によって与えられた情報に違和感を感じたとしても、次第に洗脳されてしまいます。政府が国民に与える情報は、時には非常に怖いものになるのです。数々の戦争で、政府の情報を信じた兵士たちは、お国のために死をも恐れず、戦地に向かい、犬死していったのです。当時、戦争の無意味さを訴えた学者たちはいました。でも、彼らは、非国民として非難されたのです。

今の世界は、どうなのでしょう。世界中が、コロナパンデミックになり、さらに、ワクチンパスポートが、義務化され始めています。政府が正当化しているコロナワクチン情報は、国民を洗脳しつつあります。科学者たちによる「コロナワクチンは有毒である」との意見は、陰謀論扱いされ、抹殺されています。いずれ、日本の情報社会は政府情報一色に染められてしまうことでしょう。

## 命の声

政府の一方的で非科学的な言論は、TVで毎日のように報道されています。TV情報を信じてしまった多くの国民にとっては、それは常識となり、そして、政府の思惑通りの国民の心が作り上げられています。もはや、国民は、自分たちの常識を検証する心も失っています。このままでは、政府を盲信する国民は、コロナワクチンを信仰し、未来を失うことになるでしょう。

現実の生活においては、生きるためのお金が必要です。お金を得るには、働かなければなりません。しかも、高収入を維持するには、公務員や大企業の正社員であることが有利でしょう。また、それらの職業に就くには、一流大学を卒業する必要があります。こう考えれば、政府や企業に従事している人たち、また、大学の学生たちは、保身のため、それら機関の意向に従わざる得なくなります。

そうなると、人は、お金と地位のために生きていることになります。果たして、人はお金と地位のために生きるものなのでしょうか？ 現実的に、お金と地位を失えば、名誉も贅沢な生活も失うでしょう。名誉もお金も失うぐらいだったら、死んだほうがまだ、と思う人たちがいるでしょう。でも、名誉とお金を失えば、人は死ぬのでしょうか？ 人は、動物です。だから、病気をしない程度の生活環境と食料があれば、人は生存できます。

人は、何らかの組織機関の中で生かされ、人間関係を保ちながら生きています。だから、自分だけの良識や気持ちだけでは、社会生活を送ることはできません。ほとんどの人は、この現状から抜け出すことは、できないでしょう。だからと言って、今の現状に甘んじていたならば、自分の命が危ぶまれることになる場合もあります。

収入と地位を確保するためには、政府や企業の指示に従わざるを得ない。そう考えて、有害であるコロナワクチンを接種している人たちは多いことでしょう。こういう現状を作り出したのは、政府です。でも、政府に苦情を訴えていても、日々、猛毒コロナワクチンによって命は失われています。私たちは、誰の意見に従えばいいのでしょうか？

私たちの命を守るのは、自分自身の「命の声」ではないのでしょうか？ 命が、叫んでいませんか？ 静かに、命の声を聴いてみてはどうでしょう。お金や地位よりも、もっと大切な命について考えてみてはどうでしょう。これは、とても難しいことかもしれませんが、ただ、いえることは、お金や地位がなくとも、お互いが助け合えば、命は守れるということです。

---

ラスボスの思想(11)

---

著 春日信彦

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---